

「あきたこまち R」 反対活動が消費者にどう受け止められているのか

How are the opposition activities of "Akita Komachi R" perceived by consumers?

東都生活協同組合 商品部
吉澤 正義*1
(Masayoshi YOSHIZAWA)

1. 東都生協としての背景

東都生協は、食の「安全・安心」を標榜する消費生活協同組合です。また、設立以来 50 年、生産者と直接結びつく「産地直結（産地直送ではありません）」を事業の柱としてきました。食の安全を求める消費者と、安全でおいしい農産物をつくる生産者の橋渡しの役を担ってきました。

私は 2000 年より農産部門、あるいは品質保証部門に携わり、2010 年から 2013 年までは農産部門の責任者をしていました。2010 年 4 月に、玄米および精米に含まれるカドミウムの基準値が 0.4ppm に設定され、翌年 2 月に適用となりました。そのような国の動きに先立って、東都生協では収穫期に米の産直産地から坪刈りで稲穂を送ってもらい、カドミウムの自主検査を実施してました。また、学識者を招き、生産者向けの学習会なども企画をしてきました。その年の気候や水事情に左右されるカドミウム濃度ですが、0.4ppm という基準値が設定されることで、生産者には不安の表情があったことを覚えています。

2. 生産者にとっての悲願、消費者にとっては…

宮城県の生産者の 2023 年産有機 JAS 米において、0.22ppm のカドミウムを検出しました。消費者の安全・安心への想いから 50 年以上有機栽培に取り組んできた生産者です。自分がつくる米から、発がん性のあるカドミウムを、基準値以内とは言え 0.2ppm を超えて検出したのです。

カドミウム吸収抑制米は、そのような生産者の不安を払しょくする画期的品種であり、さらには栽培方法によってヒ素の吸収も抑制することから、本来は食の安全が高まることを消費者も生産者とともに喜ぶべき品種改良であると考えています。

一方、ゲノム編集に対して反対をしている一部の市民団体は、放射線育種米である「コシヒカリ環 1 号」やその後代交配種である「あきたこまち R」に対しても反対活動をしています。生協組合員の多くは食への不安から、そのような団体が開催する学習会などに参加をしています。つまり、一部の市民団体の反対運動の格好のターゲットとなっています。客観的な情報は伝えず、印象で不安を煽るのが特徴であり、詳細を理解しないまま、人から人へ拡散されている状況があります。そのような声が生協にも寄せられています。

3. パネル討論会でお伝えしたいこと

組合員からの声をいくつか紹介したいと考えています。放射線育種や「あきたこまち R」に対する単純な質問から、危険であることを前提に、東都生協の姿勢を問うものまで様々です。質問や要望に対する回答も紹介いたします。「正しく知れば理解される」という確信を持っています。

また、秋田県以外の生産者の「あきたこまち R」に対する認識や理解度も、いくつかの産地を聞き取った上で紹介したいと思います。といいますのは、秋田県での成功が、日本の食の安全性向上に関わってきますから。他県の生産者もこのことを知って秋田県を積極的に応援できるか、あるいは、一部の市民団体の言説に乗って反対活動に加担してしまうのか、その分岐は結果に大きな影響を与えかねません。現に、多くの有機農業団体が残念ながら、「あきたこまち R」への切り替え反対を表明しており、所属している生産者は、詳細情報を得ることなく漠然と反対をしているような状況です。

4. パネル討論を通じて共有したいこと

「あきたこまち R」について、放射線照射に関する安全性に懸念がないこと、カドミウムやヒ素の摂取による健康リスクを減らすものであることは、すでにこの集まりでは共通の認識だと思います。

しかしながら、科学的根拠に基づかない、理不尽な、根強い反対運動が起こっていることも確かです。今後、日本各地で栽培されるべきカドミウム吸収抑制米が、それら反対運動に屈しないようにするには、消費者団体やマスメディアが、戦略的に情報発信をしていく必要があると思います。今回のパネル討論が、その「作戦会議」になればよいと思っています。

*1 TOHTO Co-op